白居易の閑適詩における茶の意義

粕淵彩花

序

日本に茶道があるように、喫茶の起源である中国でも、喫茶は精神文化としての一面を持っていたのだろうか。私は中国の文学を通して茶の精神的意義を探ることにした。喫茶が中国で広く普及したのは唐代である。そこで、『全唐詩』に載せられている「茶」という文字を含む詩を調べてみたところ、多数の例が挙がった。中でも一番多数の詩を作っていたのが、白居易である。白居易の漢詩を研究することで、唐代中国における茶の精神的意義が見えてくるのではないだろうか。

白居易の詩は、源氏物語などの日本文学に影響を与えたとされているためか、日本でもたくさんの研究がなされている。その中に、白居易の思想を象徴するモチーフとなっているものについての研究がある。そのものとは、酒であり、松であり、水である。その他たくさんの例が挙がっているが、今のところ茶は論じられていない。そこで私は、白居易の詩の中での茶の役割を論じようと思う。

一　茶を含む詩の分布

白居易の「茶」字を含む詩は、全部で五十六首ある。その中で、「茶山」という地名として登場している二首を除いた五十四首が、白居易が茶を詠った詩である。これらの詩には、一つの大きな特徴がある。それは、製作年代に偏りがあるということである。そこで、この節では「茶」字を含む白居易の詩を大まかに四つに分けて見ていこうと思う。以下の通りである。

江州左遷以前（～八一五）〈二首〉
「麴生訪宿」（八一二）「送張山人帰嵩陽」（八一四）

江州司馬期（八一五～八一八）〈十五首〉
「北亭招客」（八一五）「詠意」（八一七）「食後」（八一七）「重題　其二」など

杭州以後（八一八～八四六）〈三十一首〉
「病假中龐少尹携魚酒相過」（八二八）「不出」（八三二）「春盡日」（八四二）「東院」など

作成年代不明〈七首〉

「蕭員外寄新蜀茶」

作成年代を見ると、江州に左遷された八一五年を境にして、茶を含む詩の作成数が大きく増えていることがわかる。この江州左遷期は、諷喩詩から閑適詩へと白居易の関心が移っていく時期でもある。江州期に閑適詩を多く作っていく中で、構成する一つの要素に茶が含まれるようになったのではないかと思う。では、それぞれの年代の中からいくつか漢詩をピックアップし、詳細に見ていこう。

江州左遷以前

送張山人歸嵩陽

黄昏慘慘天微雪　修行坊西鼓聲絶
張生馬瘦衣且單　夜扣柴門與我別
愧君冒寒來別我　為君沽酒張燈火
酒酣火煖與君言　君何入關又出關
答云前年偶下山　四十餘月客長安
長安古來名利地　空手無金行路難
朝遊九城陌　肥馬香車欺殺客
暮宿五侯門　殘茶冷酒愁殺人
春明門　門前便是嵩山路
幸有雲泉容此身　明旦辭君且歸去

黄昏　慘慘として天　微かに雪ふり　修行坊西　鼓聲絶ゆ
張生　馬は瘦せ衣は且つ單なり　夜　柴門を扣きて我と別る
君が寒を冒して來りて我に別るるを愧ぢ　君が為に酒を沽ひて
燈火を張る
酒は酣にして火は煖かく君に言ふ　君は何ぞ關に入りて又關を
出づると
答へて云ふ前年　偶々山を下り　四十餘月　長安に客たり
長安は古來名利の地にして　空手にして金無ければ行路は難し
朝に九城の陌に遊べば　肥馬香車は客を欺殺す
暮に五侯の門に宿すれば　殘茶冷酒は人を愁殺す
春明門　門前は便ち是れ嵩山の路
幸ひに雲泉の此の身を容るる有り　明旦　君を辭して且に歸り
去らんとすと

「送張山人歸嵩陽」は、張山人が嵩陽に帰っていくのを見送る感傷詩である。別れを惜しむと共に、煩雑な都である長安を捨て、山での隠遁生活を選ぶ張山人への憧憬が感じられる。この詩の中で、茶は「殘茶冷酒は人を愁殺す」という使われ方をしている。残り物の茶も冷めた酒も、長安で歓迎されていないことを表しており、煩雑な都での生活の象徴である。この茶は負のイメージを伴っており、閑適とはなんの関連も窺われない。また、もう一首の「麴生訪宿」では、閑適詩としての風景の一端を担いながらも、強い満足ではなく、消極的な肯定をあらわすものとなっている。江州左遷以前は茶と閑適に強いつながりは見出されていないということだ。では、江州司馬期でどのような変化が起きているだろうか。

江州司馬期

北亭招客

疏散郡丞同野客　幽閑官舎抵山家
春風北戸千莖竹　晩日東園一樹花
小醆吹醅嘗冷酒　深爐敲火炙新茶
能來盡日宮棋否　太守知慵放晩衙

疏散なる郡丞は野客に同じく　幽閑なる官舎は山家に抵(もと)る
春風　北戸　千莖(せんけい)の竹　晩日　東園　一樹の花
小醆　醅(ばい)を吹いて　冷酒を嘗め　深爐　火を敲(たた)いて　新茶を炙る
能く來つて　盡日　宮棋(きゅうき)するや否や　太守　慵(ものう)きを知って　晩衙を
放(はな)せり

江州司馬期は、江州に左遷されてから異動になるまでの三年間である。左遷されることで、「兼済」の立場である官でありながら自由な時間を手に入れ「独善」に力を入れることができるようになり、閑適を詠う詩がこれ以後加速的に増えることになる。一方で、政争に巻き込まれ中央を離れて閑職に就いたことで、積極的に政治の批判をしようとする諷喩詩は下火となる。

「北亭招客」は、江州左遷直後の閑適詩の一首である。のんびりとした江州での日常と、それに対する満足が詠われている。茶は「小醆　醅を吹いて　冷酒を嘗め　深爐　火を敲いて　新茶を炙る」という形で登場する。この茶は、竹や酒と共に、江州の官舎での閑適の風景の一端を担っていて、左遷以前の、貧しさなどの負のイメージは完全に払拭されている。

また、もう一首紹介したい。

食後

食罷一覺睡　起來兩甌茶
舉頭看日影　已復西南斜
樂人惜日促　憂人厭年賒
無憂無樂者　長短任生涯

食罷(やん)で一覺の睡り　起きて來れば兩甌(りょうおう)の茶
頭を舉げて日影を看れば　已に復た西南に斜めなり
樂しむ人は日の促(はや)きを惜しみ　憂ふる人は年の賒(はる)かなるを厭ふ
憂ひも無く樂しみも無き者は　長短生涯に任す

「食後」は、昼食後、昼寝から起きて感慨を詠じた詩である。憂いも楽しみも無い状態と言うのは、まさに「足るを知り和を保つ」状態である。つまり、この詩は閑適の詩である。茶は「起きて來れば兩甌の茶」と登場する。のんびりと昼寝をした後に夕日の中で二杯の茶を飲むという情景が描かれている。この情景の中では、閑適を象徴する「もの」は茶のみである。心情描写で閑適を詠っている詩の中で、閑適を表すものとして茶のみが登場することから、閑適の思想の中に茶が根付いていることが分かる。

これら二首の詩の中で、茶は閑適の情景の中に組み込まれている。また、この二首以外の江州期の「茶」字を含む詩、全てで同じことが言える。江州期を通して、茶は閑適を象徴するものの一つとして根付いているということだ。

杭州以後

山路偶興　白居易

筋力未全衰　僕馬不至弱
又多山水趣　心賞非寂寞
捫蘿上煙嶺　蹋石穿雲壑
谷鳥晩仍啼　洞花秋不落
提籠復攜榼　遇勝時停泊
泉憩茶數甌　嵐行酒一酌
獨吟還獨嘯　此興殊未悪
假使在城時　終年有何樂

筋力未だ全くは衰へず　僕馬　至っては弱からず
又山水の趣多く　心賞　寂寞に非ず
蘿を捫って煙嶺に上り　石を蹋んで雲壑を穿つ
谷鳥　晩にも仍ほ啼き　洞花　秋にも落ちず
籠を提げ復た榼を攜へ　勝に遇へば時に停泊す
泉に憩ふ茶數甌　嵐に行く酒一酌
獨り吟じ還た獨り嘯す　此の興殊ほ未だ悪しからず
假使城に在る時も　終年　何の樂しみ有らん

「山路偶興」は八二二年、杭州への赴任中に作られた閑適詩である。山水、谷鳥、洞花などの風景を楽しみながら、茶や酒を傾け、長安には無い、閑静な状況を楽しんでいる。江州で閑適のモチーフの一つとしての茶と出会った白居易は、異動になり、江州の地を離れることになった後も茶を閑適の文物としてみなしていることが分かる。

東院

松下軒廊竹下房　暖簷晴日滿繩床
淨名居士經三卷　榮啓先生琴一張
老去齒衰嫌橘醋　病來肺渴覺茶香
有時閑酌無人伴　獨自騰騰入醉鄉

松下の軒廊　竹下の房　暖簷の晴日　繩牀に滿つ
淨名居士の經三卷　榮啓先生の琴一張
老い去り齒衰へて橘の醋きを嫌ひ　病ひ來たり　肺渴して茶の香ばしきを覺ゆ
時有りて閑酌すれども人の伴ふ無く　獨り自ら騰騰として醉鄉に入る

「東院」は、東の書院の情景を述べた詩であるが、詳細な作成年は不明である。しかし、松と竹が植わっている屋敷であり、渡り廊下を持つ程度の広さがあって、肺の病にかかっているというところから、洛陽履道里邸に居住するようになった八二四年（五十三歳）以降のことだと考えられる。洛陽履道里邸については、埋田重夫氏の『白居易研究―閑適の詩想―』の「白居易と家屋表現」に詳しくまとめられている。

終の住居である洛陽履道里邸は、白居易のこだわりに満ちている。数多の水景（敷地の五分の一程度が水辺の風景になっている）と松や竹などの樹木が溢れており、私的で、心身ともに満足することが

できる閑適空間を形作っている。閑適のための空間の最終形態だといえるだろう。残念ながら洛陽履道里邸には茶木は植わっていない（少なくとも著作の中で言及されていない）が、この閑適の空間の中で茶を味わう詩は数多く著されている。「東院」はその内の一首である。松や竹、茶、酌（酒）が閑適の情景を形作っている。

春盡日

芳景銷殘暑氣生　感時思事坐含情
無人開口共誰語　有酒回頭還自傾
醉對數叢紅芍藥　渴嘗一碗綠昌明
春歸似遣鶯留語　好住林園三兩聲

芳景銷殘（しょうざん）して暑氣生ず　時に感じ事を思い坐して情を含む
人無し口を開いて誰と共にか語らん　酒有り頭を回らして還た自ら傾く
醉ひては數叢（すうそう）の紅芍藥に對し　渴しては一碗の綠昌明を嘗む
春歸りて鶯をして語を留めしむるに似　好住　林園　三兩聲

「春盡日」は八四二年の三月末日に、変わりゆく季節を惜しんで詠った詩である。「綠昌明」というのは茶の銘柄の一種であり、酒や芍薬、鶯の声と共に情景を作り出している。時節の移り変わりを「一人でしみじみと」味わっている詩なので、この詩は「完全に私的な空間で、心身ともに満足している境地」を詠う、つまり閑適詩だといっていい。七十一歳になった最晩年の白居易の閑適の風景にも、茶が含まれているということだ。

作成年代不明

作成年代が不明な七首の漢詩は、「蕭員外寄新蜀茶」を初めとして、茶のプレゼントに対する返礼の詩が多い。返礼なので、贈られた茶そのものを賛美して詠っている。味や香りに言及しているが、それらの詩に観念的要素は含まれていないようなので、ここでは省略する。

以上のように、茶字を含む漢詩を年代で分けて分類すると、江州左遷を通して白居易の茶に対する印象ががらりと変わっていることが分かる。左遷以前の白居易にとって、茶とは「閑」をとりまくものの一つではあるが、同時に貧しさや、冷遇状態などを連想させる、負のイメージを含んだものであった。しかし、江州への左遷を通して、茶は閑適の空間を形作るもののひとつとしての地位を確立した。そこにそれまで含まれていた負の印象は完全に拭い去られ、酒と共にのんびりとした私生活を楽しむための要素のひとつとなった。

ではなぜ、このような変化が生まれたのだろうか。私は、その理由の一端に、江州が茶の産地であるということが挙げられると思う。江州は、少なくとも晋代には茶の産地として名が知られていた。関剣平氏の「茶の文化地理―魏晋南北朝時代を中心に―」には「晋代になると、巴郡の管轄地域は江州・墊江・臨江・枳の四つの県となった。その巴が朝廷に献上した貢物のなかには茶があった。（※三）」と説明されている。その江州で暮らす上で、茶は、それまでよりもより身近な飲料となっただろう。また、初めて中央の政治から離れ、閑職に就いたことで時間的・精神的ゆとりができ、閑適の思想は江州で発展していくことになる。その際に、身近な飲料・風

景（茶木として）であったことで、茶は閑適空間を形作るものの一つに加えられるようになったと考えられる。風景としての茶木については、次節「廬山草堂と茶」で詳しく述べたい。

江州期を通して、茶は閑適を彩るもののひとつとなった。そしてそれは、江州から異動になっても変わらなかった。杭州期以後の詩で見たように、江州を離れてからも、閑適の詩には相変わらず茶が登場し続けた。それは生涯を通して変わることなく、洛陽履道里邸という閑適を体現する空間を手に入れてからも、茶は閑適をあらわす要素の一つとして残り続けた。よって白居易は、江州で閑適としての茶に出会い、その後生涯を通して閑適を味わう要素の一つとして茶を捉えていた。

二　廬山草堂と茶

白居易は、江州滞在中の元和十二年（八一七）年に廬山草堂を建築している。廬山とは、江州にある南中国有数の景勝地であり、遺愛寺など数多の仏寺が林立している。この地に建てた草堂は、白居易にとって初めての「完全な私的空間」であった。そのため、この草堂には「独善」「知足」の観念を追い求め、「閑適」を実現する空間とすべく整えられている。草堂の詳細を論じるため、まずは草堂完成時に書かれた「草堂記」をまとめてみたい。

①　建設理由

元和十一年秋、太原人白樂天、見而愛之、若遠行客過故鄉、戀戀不能去。因面峯腋寺作為草堂。

元和十一年秋、太原の人の白樂天、見て之を愛すること、遠行の客の故郷を過り、戀戀（れんれん）として去る能はざるが若し。因つて峯に面し寺を腋（わき）にして草堂を作為す。

②　草堂の外観・内装

三間兩柱、二室四牖、廣袤豐殺、一稱心力。洞北戶、來陰風防徂暑也。敞南甍、納陽日虞祁寒也。木斬而已、不加丹。墻圬而已、不加白。墉階用石、羃窗用紙、竹簾・紵幃、率稱是焉。堂中設木榻四、素屏二、漆琴一張、儒・道・佛書各三兩卷。

三間兩柱、二室四牖（しゅう）、廣袤豐殺（こうぼうほうさつ）、一に心力に稱ふ。洞北戶、陰風を來たらしめて徂暑を防げばなり。南の甍を敞（たか）くするは、陽日を納れて祁寒を虞ればなり。木は斬るのみにして、丹を加へず。墻は圬（ぬ）るのみにして、白を加へず。墉階（ようかい）は石を用ひ、羃窗（べきそう）は紙を用ひ、竹の簾・紵の幃は、率ね是に稱ふ。堂中には木榻四、素屏二、漆琴一張、儒・道・佛書各三兩卷を設く。

③　草堂を取り巻く環境

是居也、前有平地、輪廣十丈、中有平臺、半平地。臺南有方池倍平臺。環池多山竹野卉、池中生白蓮白魚。又南抵石澗、夾澗有古松老杉、大僅十人圍、高不知幾百尺。修柯戛雲、低枝拂潭、如幢豎、如蓋張、如龍蛇走。松下多灌叢、蘿蔦葉蔓、駢織承翳、日月光不到地、盛夏風氣如八九月時。下鋪白石、為出入道。堂北五步、據層崖積石、嵌空垤塊、雜木異草、蓋覆其上。綠陰蒙蒙、朱實離離、不識其名、四時一色。又有飛泉植茗、就以烹煙、好事者見、可以銷永日。堂東

有瀑布、水懸三尺、瀉階隅、落石渠、昏曉如練色、夜中如環珮琴筑聲。堂西倚北崖右趾、以剖竹架空、引崖上泉、脈分線懸、自檐注砌、累累如貫珠、霏微如雨露、滴瀝飄灑、隨風遠去。其四傍耳目杖屨可及者、春有錦繡谷花、夏有石門澗雲、秋有虎溪月、冬有爐峰雪、陰晴顯晦、昏旦含吐、千變萬狀、不可殫紀、覼縷而言。故云甲廬山者。

是の居や、前に平地有り、輪廣十丈、中に平臺有り、平地に半ばす。臺の南に方池有り平臺に倍す。池を環って山竹・野卉多く、池中に白蓮・白魚を生ず。又南のかた石澗に抵りては、澗を夾みて古松・老杉有り、大きさは十人の圍に僅く、高さは幾百尺なるかを知らず。修柯は雲を戛り、低枝は潭を拂ひ、幢の豎つが如く、蓋の張るが如く、龍蛇の走るが如し。松下に灌叢多く、蘿蔦の葉蔓は、駢織承翳し、日月の光も地に到らず、盛夏の風氣も八九月の時の如し。下には白石を鋪きて、出入の道と為す。堂北五歩、層崖・積石・嵌空・垤塊に據りて、雜木異草、其の上を蓋覆す。綠陰蒙蒙、朱實離離、其の名を識らず、四時一色なり。又飛泉有りて茗を植え、就きて以て烹煉す。好事者見て、以て永日を銷すべし。堂の東に瀑布有り、水懸かること三尺、階の隅に瀉ぎ、石渠に落ち、昏曉には練の色の如く、夜中は環珮・琴筑の聲の如し。堂西は北崖の右趾に倚り、剖竹を以って空に架し、崖上の泉を引き、脈分線懸、檐より砌に注ぎ、累累として貫珠の如く、霏微として雨露のごとし。滴瀝飄灑として、風に隨って遠く去る。其の四傍、耳・目・杖の屨しば及ぶ可き者は、春には錦繡谷の花有り、夏には石門澗の雲有り、秋には虎溪の月有り、冬には爐峰の雪有り。陰晴に顯晦し、昏旦に含吐し、千變萬狀、殫く紀し、覼縷して言ふべからず。故に廬山に甲たる者と云ふ。

④　落成式

時三月二十七日、始居新堂、四月九日、與河南元集虛、范陽張允中、南陽張深之、東西二林寺長老湊公、朗、滿、晦、堅等凡二十有二人、具齋施茶果以落之。因為草堂記。

時に三月二十七日、始めて新堂に居り。四月九日、河南の元集虛、范陽の張允中、南陽の張深之、東西二林寺の長老湊公、朗、滿、晦、堅ら凡そ二十有二人と、齋を具へ茶果を施して以て之を落す。因つて草堂記を為る。

さて、草堂の作りについて分かる「草堂記」の文章は、内容に照らして四段落に分けられる。草堂の作成理由は、①にあるように廬山の風景に心を奪われたからである。そして、その美麗な廬山の地に建てた草堂の詳細が②と③で描かれている。草堂自体は、かなり簡素で実用的に作られている。柱を朱塗りにせず、壁も漆喰で塗らない土壁で、戸口や屋根の高さも過ごしやすさを優先していることが②から分かる。家の中にある儒教・仏教・道教の経典は、閑適の観念を形作る根源の思想である。また、③から読み取れる草堂を取り巻く環境の中には、閑適の空間を象徴する事物がたくさんあらわれる。まず、水景である。平地と同じ広さの「池」があり、その中には「白蓮」が咲き「白い」魚が泳いでいる。こんこんと水が湧く「泉」があり、近くに茶の木が植わっている。草堂の東には「滝」があり、また崖の上の泉から水を引いてきている。これらの水景は目と耳とを楽しませる、大切な閑適の要素である。次に、植物である。池の周りには「竹」が植えられ、枯れた谷川の向こうには巨大

な「松」と杉の木が聳えている。泉のそばの「茶の木」からは葉を摘んですぐに茶を飲むことができる。これら植物も、閑適の要素として挙げられる。

このように、草堂は全体を通して「閑適」な生活のための空間を形作る要素で溢れている。その中に「茶」が含まれるということは、草堂建設時には「茶」がしっかりと閑適の観念に根付いていることである。一方で、白居易の著作全体を通してよく登場するものの、この「草堂記」にはあらわれていないものがある。それは「酒」である。白居易は酒好きで、酒を詠った詩を千首以上残している。閑適の文学の中にも登場することが多く、特に茶が含まれるものには酒も含まれていることが多い。この草堂記でも、④の落成式の祝いの席で、酒も登場してもよいのではないか。何故、「草堂記」には酒が一度も出てこないのだろうか。その疑問を解決するため、草堂で作られた詩を二首見ていきたい。

重題　其二

長松樹下小溪頭　班鹿胎巾白布裘
藥圃茶園為產業　野麋林鶴是交遊
雲生澗戸衣裳潤　嵐隠山廚火燭幽
最愛一泉新引得　清冷屈曲繞階流

長松樹下　小溪の頭　班鹿胎の巾　白布の裘
藥圃　茶園　產業と為し　野麋　林鶴　是れ交遊
雲は澗戸に生じて　衣裳潤ひ　嵐は山廚を隠して　火燭　幽かなり
最も愛す　一泉新たに引き得て　清冷　屈曲　階を繞りて流るるを

香鑪峰下新置草堂即事詠懷題於石上

香鑪峯北面　遺愛寺西偏
白石何鑿鑿　清流亦潺潺
有松數十株　有竹千餘竿
松張翠繖蓋　竹倚青琅玕
其下無人居　惜哉多歲年
有時聚猿鳥　終日空風煙
時有沈冥子　姓白字樂天
平生無所好　見此心依然
如獲終老地　忽乎不知還
架巖結茅宇　斲壑開茶園
何以洗我耳　屋頭落飛泉
何以淨我眼　砌下生白蓮
左手攜一壺　右手挈五弦
傲然意自足　箕踞於其閑
興酣仰天歌　歌中聊寄言
言我本野夫　誤為世網牽
時來昔捧日　老去今歸山
倦鳥得茂樹　涸魚返清源
捨此欲焉往　人間多險艱

香鑪峯の北面　遺愛寺の西偏

白石 何ぞ鑿鑿たる　清流 亦た潺潺たり
松有り數十株　竹有り千餘竿
松は翠の繖蓋を張り　竹は青き琅玕を倚す
其の下 人の居る無し　惜しいかな多歳の年
時有りて猿鳥を聚め　終日風煙を空しうす
時に沈冥の子有り　姓は白 字は樂天
平生好む所無く　此を見て心依然たり
終老の地を獲たるが如く　忽乎として還るを知らず
巖に架して茅宇を結び　壑を斲りて茶園を開く
何を以て我が耳を洗ふ　屋頭に飛泉落つ
何を以て我が眼を淨む　砌下に白蓮生ず
左手に一壺を攜へ　右手に五弦を挈ぐ
傲然として意自ら足り　其閑に箕踞す
興酣にして天を仰いで歌ふ　歌中に聊か言を寄す
言ふ我は本野夫なり　誤つて世網の牽くところと為る
時來りて昔 日を捧げ　老い去つて今山に歸る
倦鳥 茂樹を得　涸魚 清源に返る
此を捨てて焉くに往かんと欲する　人間 險艱多し

「重題　其二」は廬山草堂での閑適生活を詠った詩である。「藥圃茶園 産業と為し」とあるように、白居易が草堂の近くに茶畑を持っていたことが分かる。また、「香鑪峰下新置草堂即事詠懐題於石上」にも、「壑を斲りて茶園を開く」とある。谷を切り開いて茶畑を作っているようなので、「草堂記」にかかれていた谷川の近くだろうか。つまり、「草堂記」に記述があった泉のそばの茶の樹と、これら二首にある茶園の二箇所に茶の木が植えられていることになる。

一方で、酒はどうだろうか。「重題　其二」には「酒」や「酔」などの酒を表す語はまったくでてこない。「香鑪峰下新置草堂即事詠懐題於石上」にはかろうじて「左手に一壺を攜へ　右手に五弦を挈ぐ」という記述があり、この壺に酒が入っているとされるが、登場する聯は茶のほうが早い。また、「香鑪峰下新置草堂即事詠懐題於石上」に登場する閑適空間を形作るものを順に並べると、①「白い」石と流水②松と竹③草堂と茶園④泉⑤白蓮⑥酒と琴となっている。前半に水景、松、竹が来ていることを考慮すると、閑適としての要素が強い順に並んでいるのではないだろうか。そうすると、廬山草堂においては、閑適空間を形作るものとしてかなり強い地位に茶が来ることになる。また、酒も閑適としての要素はとても強いが、廬山草堂においては、茶のほうが先に連想されるということがわかる。

「草堂記」「重題　其二」「香鑪峰下新置草堂即事詠懐題於石上」を並べてみる事で、廬山草堂には茶園があり、それは閑適空間の一要素として詠われていることが分かった。前節で論じた、江州期以後に茶詩が増えているということも、茶の産地、江州で暮らすことになり、茶がより身近なものになったというだけでなく、草堂という閑適空間の一要素として茶の木があったということも理由に挙げられるだろう。草堂以降、白居易は異動に伴い住居を転々とするが、どの住居にも茶の木が植えられていたという記録はない。それはつまり、「茶の木＝廬山草堂」という連想が江州期以後白居易の中に生まれたということではないだろうか。ただの飲料としてではなく、閑適の原風景の中に茶が含まれたからこそ、白居易の閑適詩に茶が

含まれることが増えたのである。

三　閑適と茶

第一節・第二節で述べてきたように、白居易は、茶を閑適の空間の一要素として捉えている。江州司馬期に、特産である茶を飲み、また草堂で茶木を育てることで、茶がより身近なものとなった。そして、江州期は諷喩詩から閑適詩へと重きを置く観念が移り変わっていく時期でもあるので、比重を増した閑適詩と茶が強く結びつくようになった。

さて、次の詩を見てもらいたい。

詠意

常聞南華經　巧勞智憂愁
不如無能者　飽食但遨遊
平生慕此道　今日近此流
自來潯陽郡　四序忽已周
不分物黑白　但與時沈浮
朝飡夕安寢　用是為身謀
此外即閑放　時尋山水幽
春遊慧遠寺　秋上庾公樓
或吟詩一章　或飲茶一甌
身心一無繫　浩浩如虛舟
富貴亦有苦　苦在心危憂
貧賤亦有樂　樂在身自由

常て南華の經を聞くに、巧みなるは勞し智あるは憂愁す
如かず無能の者の、飽食して但だ遨遊するに
平生此の道を慕ひ、今日此の流に近し
潯陽郡に來りてより、四序忽ち已に周る
物の黑白を分かたず、但だ時と沈浮す
朝に飡らひ夕べに安寢し、是を用て身の為に謀る
此の外即ち閑放、時に山水の幽を尋ぬ
春は慧遠の寺に遊び、秋は庾公が樓に上る
或いは詩一章を吟じ、或いは茶一甌を飲む
身心一も繫がるる無く、浩浩として虛舟の如し
富貴も亦た苦有り、苦は心の危憂に在り
貧賤も亦た樂有り、樂は身の自由に在り

「詠意」は、仏教の説法を冒頭におき、身分の高低ではなく自由なことに楽しみがあるとする閑適詩である。この詩には、茶は「或吟詩一章　或飲茶一甌（或いは詩一章を吟じ、或いは茶一甌を飲む）」という形で登場する。白居易の詩には、この句と類似する句を含んだ詩が三首ある。一首目は「首夏病間」で、「或飲一甌茗，或吟兩句詩。（或いは一甌の茗を飲み，或いは兩句の詩を吟ず。）」という句である。「茗」とは茶のことを指す。二首目は「偶作二首」の其二で、「或飲茶一醆，或吟詩一章（或いは茶一醆を飲み，或いは詩一章を吟ず）」となっている。三首目は「池上篇」で、「時飲一杯，或吟一篇（時に一杯を飲み，或いは一篇を吟ず）」である。この場合の「飲む」ものは茶である。これらの四首に共通することは、

全て閑適を詠った詩であることと、「或吟」という言葉が入っていること、茶を飲みながら詩を作るという同じ意味であるということの三つである。また、この四首以外に「或吟」という言葉が入っている白居易の詩は存在しない。そこで、数は少ないものの、この「或飲茶……或吟詩……」（逆も可）は白居易の中で定型句になっていることが分かる。茶を飲みながら、詩を作ることが晩年の白居易の日常になっていたのだろう。また、この定型句が使われている詩がすべて閑適の詩だということも重要である。つまり、「茶」は、白居易の中で一種の定型となる程度に閑適をあらわすものとして意識されていたことになる。江州以後茶の詩が増えたのは、無意識によるものではない。白居易自身が茶を閑適空間の一要素として認識していたのだ。

しかし、閑適空間の象徴の一つに数えられるからといって、「茶」自体が固有の思想を持っていたわけではない。あくまで閑適な生活を送るための要素の一つに過ぎず、そこに日本の茶道のような独立した思想はない。白居易にとっての茶の精神的意義は、あくまで「閑適のための空間を形作り、閑適な生活を送るためのエッセンスのひとつ」に終始している。

結

白居易の閑適詩は「独善」「知足」に代表される「公務から解放された私的な空間で、身心ともに満ち足りた状態」を詠う詩である。閑適な状態に身をおくためにはそのための空間が必要となり、閑適のための空間は、それを形作るいくつかの重要な要素があった。それは「清らかさ」を象徴する水の景色であり、松竹であり、酒であり、そして茶であった。白居易は、廬山草堂で始めて「公務から解放された完全な私的空間」を手に入れ、以後異動による転居を繰り返しながらも、長安の新昌里邸、洛陽の履道里邸といった「私的空間」を手に入れる。その際、かならず池や泉などの水景を取り入れ、松と竹を植えて閑適のための空間を作っていった。茶は、閑適のための空間を手に入れた江州が産地であるため江州期に親しみやすく、閑適詩に取り入れられるようになった。また、茶と閑適が結びついた後に廬山草堂を建てたことで、草堂の近郊に茶園を所有することになる。そのことによって閑適空間の中に茶がしっかりと根付き、その地位を確立することになった。それ以後の屋敷には茶木が植わっていないため、晩年の白居易が廬山を懐古するよすがになったのではないかとも考えられる。そして、最終的には「或吟」を使った定型の句も生まれた。茶を飲みながら閑適詩を作ることが、白居易の日常になっていたことがうかがえる。また、諷喩的・感傷的性格も同時に持ち合わせる松竹や酒と違い、茶の観念は全て閑適に寄せられている。閑適以外の詩で登場する場合は、「茶」そのものの効用や味を詠った返礼の詩が多い。つまり、閑適空間を象徴し、その他の思想にぶれない貴重なモチーフの一つといえる。

補記・参考文献

千玄室『茶の精神』講談社　二〇〇三年十月

埋田重夫『白居易研究―閑適の詩想』汲古書院　平成十八年十月三十日

関剣平「茶の文化地理　魏晋南北朝時代を中心に」『立命館文學』六一九号　二〇一〇年

市川桃子「白居易詩の植物」『白居易研究年報』勉誠出版　十号　二〇〇

九年

岡本繁『新釈漢文大系　白氏文集』明治書院　平成十五年

竹内実『中国喫茶詩話』淡交社　昭和五七年

布目潮渢『中国喫茶文化史』岩波書店　一九九五年

川合康三『白楽天―官と隠のはざまで』岩波書店　二〇一〇年

下定雅弘『白楽天の愉悦：生きる叡智の輝き』勉誠出版　二〇〇六年

下定雅弘『白氏文集を読む』勉誠出版一九九六年

丹波博之「白楽天の草堂生活」『大手前大学論集』二〇〇八年九号

高橋忠彦「中国喫茶文化と茶書の系譜」『東京学芸大学紀要・人文社会科学系・1』東京学芸大学　二〇〇六年五七号

丸山　茂「楽天の酒（上）・（下）」『白居易研究年報』勉誠出版　十号・十一号　二〇〇九年・二〇一〇年

中木　愛「白居易の酒の描写に見られる充足感の詠出」『白居易研究年報』勉誠出版　九号　二〇〇八年

陳狲『白居易の文学と白氏文集（ぶんしゅう）の成立』勉誠出版　二〇一一年

岡倉天心著・ソーントン不破直子訳『茶の本』春風社　二〇〇九年

岡田孝男『茶室平面集』学芸出版社　一九九二年

受贈雑誌（四）

国文学論考　都留文科大学国語国文学会

国文鶴見　鶴見大学日本文学会

国文論叢　神戸大学文学部国語国文学会

国文論藻　京都女子大学国文学会

古代研究　早稲田古代研究会

語文　大阪大学国語国文学会

語文　日本大学国文学会

語文研究　九州大学国語国文学会

語文と教育　鳴門教育大学国語教育学会

語文論叢　千葉大学文学部日本文化学会

駒沢国文　駒沢大学文学部国文学研究室

佐賀大国文　佐賀大学教育学部国語国文学会

相模国文　相模女子大国文研究会

滋賀大國文　滋賀大国文学会

「作家特殊研究」研究冊子　法政大学大学院人文科学研究科

實践國文學　日本文学専攻

斯道文庫論集　実践国文学会

慶應義塾大学附属研究所斯道文庫

上越教育大学国語研究　上越教育大学国語教育学会

上智大学国文学科紀要　上智大学文学部国文学科